令和元年度共通教育アンケート（1 年次生対象）実施報告書

大学教育センター
全学共通教育部門長　大塚　豊

１．アンケートに対する学生の取り組みと周知方法について
・令和元年度の学生対象の共通教育アンケート調査は、共通教育を中心とした学修についての、自由記述を含む 39 項目の設問により、当初令和 2 年 1 月 6 日(月)～2.月 29 日(土)の予定で実施した。しかし、最終日間近になっても全学の平均回答率が低調であったため、3 月 20 日（金）まで実施期間を延長した。その結果、最終的には昨年度の 52.8%とほぼ同じ 53.1%まで上昇した。1 年次生総数の 933 人中、回答したのは 495 人である。これは前々回の平成 29 年度の回答率 56.8%に比べて低く、さらなる改善を図り、回答を促す工夫が必要である。学科毎の回答率を見ると、薬学科 90.4%、スマートシステム学科の 80.0%、生命栄養科学科 69.8%のように高い学科がある一方、国際経済学科 21.3%、人間文化学科 36.7%、情報工学科 42.1%のように、全学平均を大きく下回る学科が見られる。薬学科は毎年高い回答率であり、国際経済学科は毎年低いというように、学科による顕著な傾向が窺える。回答率が全学平均に達していない学科については、猛省を促したい。学部としての回答率は、薬学部 90.4%に次いで、生命工学部 56.6%、工学部 51.5%、経済学部 45.2%、人間文化学部 43.5%の順であった。次年度以降、回答率の低かった学部・学科については、学生への働きかけなど、次回以降、何らかの措置を講じることを強く求めたい。

２．所属学部・学科のカリキュラム理解度および大学教育センターの学修支援体制理解度
・所属する学部・学科のカリキュラムマップについて、11.9%の学生（昨年度は 13.4%。以下括弧内の数値は比較対照のために挙げる昨年度調査の結果）は「よく理解している」、43.4%（45.0%）は「だいたい理解している」と回答しており、6 割弱は理解している。「少しだけ理解している」と回答したのは 29.9%である。学部別に見ると、薬学部の回答者のうち 9.6%（11.8%）が「まったく知らない」と答えており、「聞いた（見た）ことがある」程度の者の 15.4%を加えると、回答者 104 人の 4 分の 1 はほとんど理解していない。薬学部については一昨年度、昨年度もこうした自学部のカリキュラムマップについて理解の乏しい学生がなりの比率を占め、他学部に比べて際だって高い比率を示す状況が続いている。カリキュラムの構成について学生に対して行われた説明の適切性に疑問が残る。
・次に、大学教育センターが行っている各種の学修支援について、「まったく知らない」と回答した学生が回答者全体の 50.2%にのぼった。平成 30 年度は 35.5%であり、その後、周知方法の改善をあれこれ試みたが、令和元年度は却ってさらに増えてしまった。学修支援相談室について知っている者はそれぞれ 40.5%と昨年の 25.7%と比べ 15 ポイントも増えた一方、e ラーニング・システムについて知っている者は 9.3%（13.3%）に留まった。なお、数学基礎力 UP 講座については、従来利用してきた公文式教材に対する各学科からの評価が芳しくなかったことと、継続実施への強い要望が見られなかったことから、2019 年度からは開講を一旦停止している。これに代わって、数学に特化したパーソナルな指導が行えるように、大学教育センターの特任講師が指導時間を延長し、工学部生にはとくに焦点を絞って指導を行う措置を講じている。これをテコとして、学修支援体制の認知度が向上することを願いたい。
・e ラーニング教材のうち、以前には提供していた物理、化学に関する e ラーニング教材は使用頻度が低かったことから、2019 年度には英語教材は引き続き学内外で利用できるものの、物理、科学については取り止めることになったことが、e ラーニング・システムについての認知度の低さにつながっていることも考えられる。e ラーニング・システムを利用した学生による感想を自由記述に見てみると、「ネットで使いやすい」「自分の勉強したい部分がすぐに出来て良かった」などと記されている。しかし、一方で「e ラーニング・システムと

いうものがわからない」「どんな場合に利用すればいいかわからない」といった意見が見られ、説明不足を感じさせる。加えて、ソフトの内容精選の努力が引き続き必要である。
・一方、高校までの科目を復習する授業すなわちリメディアル教育の必要性については、「必要である」が 40.8%（40.1%）、「まあまあ必要である」と回答した学生の割合は 38.2%（37.6%）で、ほぼ昨年度と同じ比率である。8 割近くの学生がリメディアル教育に対する必要性を感じており、学修支援相談室が役立ちうる余地は十分にある。学修支援相談室を「まったく利用したことがない」と答えた学生が 90.5%と昨年度の 85.7%をさらに上回る高い数値となった。その理由は、「利用する必要性がない」35.6%、「場所が分からない」26.0%、「時間が合わない」12.1%、「個別相談に不安（抵抗）がある」8.5%、「職員室のようで入りづらい」8.0%である。学修支援相談室の存在について新入生のオリエンテーションに際して、各学科が学修支援相談室を学内施設の見学に組み入れるなど周知に努めるとともに、気軽に訪れることができる雰囲気づくりが必要である。
・高校までの科目を復習する授業の必要性に関連して、「必要である」「まあまあ必要である」と答えた 79.0%の学生に、どの科目のリメディアル教育が必要かを尋ねたところ、英語が 21.9%（23.7%）とトップであり、次いで数学 17.4%、生物 13.2%、化学 12.1%など理数系の科目が続いている。学生が最も復習を必要とすると考えている英語については、薬学部生は 13.5%に留まったが、その他の学部はいずれも 20～30%の者が選び、復習の必要性を感じている。本学学生の英語入試の結果から見ると、入試の多様性とも相俟って、中学校から高校 1 年レベルの学力状況の学生が多数見られる。入学直後に行う英語プレイスメント・テストにおいても、英語力に弱点のある学生が多く見出されている。担当教員は、大学での英語教育であるので単に中学、高校での学習を繰り返すのではなく、大学生として楽しめる、また発見のあるように教材及び指導法に配慮しており、教え方を対話的にして興味をもたせるよう腐心し、再履修クラスも設定して復習的な指導を実践しているが、なおいっそうの工夫を凝らすことが求められる。

３．フクトーークについて
　大学教育センターでは、共通教育を中心として大学での学び関する学生の生の声を聞き、可能な限り教育改革に活かしていくための「フクトーーク」と称する催しを毎年ほぼ年末に実施している。今回の調査では、新たな質問項目としてフクトーークに関するものを加えた。昨年度は 12 月 11 日（水）16:30～18:00 に「教養講座の在り方」をテーマとして実施し、各学科から２、３名ずつ出席した学生が討議を繰り広げた。この催しについて、「共通教育科目などについて教員と学生が考える企画「フクトーーク」について知っていますか」との設問に対して、全体の 39.0%が「知っている」と回答し、他の 61.0%は知っていなかった。続く「フクトーーク」に参加したいと思いますか」に対しては、「是非とも参加したい」は 1.2%に留まり、「テーマによっては参加したい」と答えたのは 16.4%であり、他の者は「参加要請があれば考える」20.8%、「参加するつもりはない」61.6%と消極的である。毎年、自主的に参加する学生はごく限られ、大多数は各学科からの推薦や指名で参加する状況であるが、参加した後の感想には前向きのコメントが多く見られ、フクトーークにおける学生からの提案で生まれた科目もあることから、今後、各学科の協力も得て、さらに充実を図る必要がある。

４．共通教育全体について
・「共通教育科目で充実していると思われる科目群」は何かという設問では、上位から「教養ゼミ」18.6%、「情報リテラシー」が 16.6%、「日本語表現法」15.1%、「英語」14.6%と続き、教養科目の中では D 群の「思索と創造」が 11.0%と 1 割を越えたが、その他は数%に留まっている。「思索と創造」は昨年度も 11.6%と比較的高い比率を示した。「初年次教育科目（教養ゼミ）」が充実していたと回答した学生が全学平均の比率を超えていたのは、薬学部 21.4%、人間文化学部 20.3%であった。

・「入学当初、共通教育に期待していたこと」は何かという設問では、上位から「専門での勉強の基礎」17.9%（19.7%）、「専門以外の幅広い知識・教養」17.4%（15.7%）、「実用的な知識・技能」15.6%（15.4%）、「基礎学力の向上」12.7%（10.5%）、「学生同士の交流」11.6%（13.4%）等の順になっている。前年度調査結果とほぼ同じであったが、「基礎学力の向上」はランクが上がった。逆に「教員との交流」は 3.7%に留まり、この項目は昨年度も 3.2%と低い比率であった。教員とのパーソナルな関係の中で得られるものへの期待が大きくない現実を真摯に受け止めるとともに、教員の側から積極的に働きかけることで、本学の教員が学生に専門性や人間性において他所では得られない大きな影響を及ぼすことを期待したい。
・次に、これらの「期待内容に関して、どれほどの期待達成度あるいは満足度が得られたか」を%で回答することを求めたところ、満足度 70%以上と回答した学生が最も多く、その割合は 11.5%（12.6%）である。また、満足度 100%～70%の学生が全体の 27.4%を占めた。この数値は昨年度の 29.5%に比べて、2 ポイントながら低下した。
・上述したとおり、共通教育科目群の中で教養ゼミは今年度最も充実していた科目に位置付いているが、初年次教育科目として開設されている教養ゼミを履修して良かった点については、上位から「高校生活(学習)から大学生活（学修）へスムーズに移行できた」23.7%（16.9%）、「コミュニケーション能力が向上した」11.9%（12.2%）、「大学生としての学修スキルが身についた」11.4%（12.7%）等の順になっており、これら 3 項目はほぼ毎年同じ結果になっている。一方、教養ゼミの改善点については、「特に改善点はない」という回答が 43.1%（45.0%）と最も高い比率であるが、これに次いで「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」15.7%、「成績評価の基準・方法をもっと明確にして欲しい」9.1%、「コミュニケーションの場がもっと欲しい」8.5%、「授業の進め方をもっと工夫して欲しい」7.2%、「学生の予備知識や理解度をもっと考慮して欲しい」6.7%といった順になっている。昨年度の調査結果と比べて見ると、「成績評価の基準・方法」への関心が強く、「コミュニケーションの場」を求める傾向がわずかながら強く見られるようである。工学部の学生の 13.2%は「成績評価の基準・方法をもっと明確にして欲しい」を挙げ、とくに建築学科の学生 18.6%が挙げている。また、人間文化学部の学生の 23.5%が「学生の関心に対応する授業内容にして欲しい」を選択しており、学科別に見ても、人間文化 23.1%、心理 25.6%、メディア 20.0%と、いずれの学科も全学平均をかなり上回っている。教養ゼミの内容に関する再検討を要するかもしれない。教養ゼミの改善点として挙げられた学生の意見を見ると、「先生同士の連携がなさすぎる」「座学ばかりでつまらない」「わざわざ時間を費やしてあまりためにならないような、作業や話はやめて欲しい」などがある。
・本学で創設以来続いている教養講座に関しては、「幅広い教養が身についた」24.7%（29.6%）、「知的好奇心をくすぐった」18.0%（17.4%）、「芸術・文化にも触れられてよかった」12.0%（15.9%）など、概ねポジティブな回答の比率の高さが目につくが、一方で「あまり興味の持てないような内容が多かった」21.1%（12.4%）、「難しい内容が多かった」11.2%（11.8%）というネガティブな回答を選択した学生もおり、とくに「あまり興味の持てないような内容が多かった」は、昨年度よりかなり高い比率になっていることから、今後の教養講座の講師や内容の選定には細心の注意を払う必要がある。

５．語学・リテラシー科目について
・日本語表現法については、「とても満足した」25.3%と「ある程度満足した」48.3%を合わせると 73.6%となり、概ね良好としてよいかと思われる。但し、「あまり満足しなかった」3.4%、「まったく不満だった」2.4%を見ると、難易度の調整などの点でなお課題が残るとも思える。日本語表現法の難易度に関しては、「今の程度の内容でよい」78.4%（74.8%）である。一方で「今より少ない内容でよい」とする者が 7.5%、「まったく必要性を感じない」者も 4.0%いる。日本語表現法の授業で良かった点を尋ねたのに対して、「日本語の基礎力が向上した」37.7%（30.7%）はシラバスで謳っている前半の目標、「文章表現力が向上した」

21.8%と「レポート作成に役立つ」16.2%は後半の目標に相当するところである。こうしてみると、授業の目標は概ね達成されているようである。学生の自由記述には「資格が取得できた」というのが見られた。これは日本語検定試験に団体参加していることを指しており、今後も学生の学修意欲を高めるために継続実施する必要があろう。
・情報リテラシーは、上述したとおり、共通教育科目の中で充実していた科目として、教養ゼミに次ぐものとして選択された。本学の情報リテラシー科目は、1 年生を対象とした科目で、高校で学んだ情報科目についての復習と大学教育で必要な最低限のスキルを学ぶ高大接続の要素をもっている。情報リテラシー教育の満足度を見ると、「とても満足した」30.5%、「ある程度満足した」46.9%と、8 割弱の学生が満足を表明している。また、回答者の 81.2%は「今の程度の内容でよい」としている。何が良かったかを尋ねたところ、「レポート作成に役立つ」25.1%、「ICT を使用する技能が身についた」22.4%、「ICT を使用して情報収集・分析・処理能力が身についた」15.8%、「情報倫理（情報モラル・情報マナー）が身についた」14.8%などの順になっている。今後も大学生の学修や生活にとって不可欠な知識やスキルであり、また、SNS に使用における高度なモラルが求められている現実があることから、いっそう充実した教育の展開が望まれる。
・英語については、全学において、「とても満足した」28.1%（30.5%）、「ある程度満足した」48.3%（46.0%）を合わせると、76.4%（76.5%）が満足感を示している。但し、高い満足度はあくまでも情意的な評価である。教材の難易度、教員の教え方、単位の取り易さなど、複合的な側面を含んでいる。学生がどの面での力、英語学力、集中力、努力する力などをどのように伸ばしたかを、明確に捉える評価法の開発が引き続き望まれる。「今以上に高度な内容が必要」とした学生は 16.4%に留まり、「今の程度の内容でよい」が 67.5%と多数を占めている。「今よりも少ない内容でよい」とする者が、スマートシステム 37.5%、税務会計 22.2%、海洋 20.0%と比較的高い比率になっている背景については検討に値する。教材の難易度は、各教員が本学の学生の英語習得段階を踏まえた上で選んでいる。教材難易度を上げることを求めている学生は 16.4%であるので、英語を苦手とする学生の学修ケアだけでなく、英語を得意とする学生、より高度な英語を学びたい学生に対するケアも十分に配慮せねばならないであろう。
　次に、英語科目の良かった点については、「英語の能力（辞書があれば英文を読める力等）が向上した」が 28.6%（20.3%）、「英語を学習する楽しさを実感した」が 14.6%（18.4%）、「コミュニケーション能力が向上した」が 13.4%（11.6%）、「能力別クラス編成が適切であった」11.2%（11.1%）の順であり、この順位は昨年も同様であった。英語科目の良かった点について、自由記述欄に記入された内容を見ると、あるネイティブ教員の授業について「オールイングリッシュで終始英語を解釈する授業になっていて身につきます。 休み時間も積極的に英語で話しかけると英語で返してくれるので、英語を話す楽しさがわかりました」と高く評価する意見の一方で、「先生が何言ってるかわからなくて質問もできない」と難しさを訴える意見があり、さらにクラス編成の在り方についても「能力にあった講師がついていて学びやすい環境だった」と、好意的な評価を記した学生がいた。「学習支援体制(自習や補習等)が整備されていた」については、わずか 1.2%の者が選択したに過ぎなかった。上述した e ラーニング・システムや学修支援体制に関する質問項目で述べたとおり、TOEIC 入門や入門英文法に限定された e ラーニングや学修支援相談室を設けているものの、学生が十分に活用していないことが判明した。
・「初修外国語」のどの語種を選択したかについての設問に関して、回答したのは延べ 417 人である。回答者総数は 495 人であるから 78 人はこの設問に答えていない。薬学部については、初修外国語の履修を義務づけておらず、希望する者のみが学ぶことになっていることが主たる原因であろう。また、複数の初修外国語を学んだ学生も少数ながら含まれていることもありうる。この結果、回答者を語種別に見ると、中国語が 45.8%（57.2%）、韓国語が 19.4%（6.3%）、フランス語が 17.7%（16.4%）、ドイツ語が 17.0%（24.6%）の順になる。参考のため括弧内に示した昨年度の比率を見ても分かるように、初修外国語の履修は希望

によることを基本としているため、年度による履修者割合の変動が起こる。平成 30 年度に新設した韓国語の履修者が増えていることが分かる。
・これら初修外国語 4 言語の学修に関して、「とても満足した」は 34.9%（23.1%）、「ある程度満足した」は 44.4%（49.1%）と、約 8 割が高く評価しており、「あまり満足しなかった」5.4%（5.2%）、「まったく不満だった」1.3%（1.2%）を大きく上回っている。昨年度もほぼ同程度の低い評価を下した者が見られ、そもそも外国語を学ぶことへの興味関心の有無ということを考慮しなくてはいけないかもしれない。授業の難易度について、「今以上に高度な内容が必要」は 7.1%、「今よりも少ない内容でよい」は 13.5%であった。しかしながら、多くの学生にとって初めて学ぶ初修外国語は、中高での英語学修の「しがらみ」を離れ、語学やその背景にある当該国の文化を学ぶ楽しさを伝えられるよう、教育内容や教授法に関して、なおいっそうの工夫が望まれるところである。
・「初修外国語の良かった点」については、「初修外国語の能力(辞書があれば原文を読める能力等)が向上した」が 30.7%（19.6%）、「初修外国語を学習する楽しさを実感した」が 28.4%（44.6%）であり、「異文化の理解が深まった」18.1%（11.5%）がこれに次いでいる。「専門の勉強に役立つ」を選択した学生は 6.4%（11.5%）であった。

６．教養教育科目について
・教養教育科目（A～F 群）を全体として見た授業時間数と内容について、「今の程度の内容でよい」と回答した学生が 81.3%（76.5%）を占めた。「今以上に高度な内容が必要」と回答したのは 6.1%（9.0%）、逆に「今よりも少ない内容でよい」と回答したのは 8.7%（10.5%）であった。
・教養教育科目履修の際に特に重視した点については、上位から「知的好奇心を満たす」35.8%（38.6%）、「基礎学力の向上」23.4%（20.1%）、「資格取得」23.2%（22.2%）、「専門に役立てる」11.5%（12.6%）の順である。
・教養教育科目を履修した結果、良かった点については、上位から「幅広い教養が身についた」30.8%（33.8%）、「知的好奇心を満たした」22.5%（24.4%）、「基礎学力が向上した」16.3%（13.4%）の順であり、この設問に対する回答の傾向は昨年度とほぼ同様である。

７．キャリア教育（1 年次履修のキャリアデザイン 1）について
・「キャリアデザイン 1 を受講して将来役立つ力が身に付いたと思いますか?」と、この科目に対する満足度を尋ねたところ、「とても満足した」が 24.2%（23.5%）、「ある程度満足した」39.2%（40.3%）と、6 割以上の者が満足したと回答した。逆に、「あまり満足しなかった」5.7%、「まったく不満だった」5.5%と、１割強の者は満足していないという結果になっている。
・キャリアデザイン 1 の難易度については、「今の程度の内容でよい」79.8%、「今以上に高度な内容が必要」6.9%という回答の一方で、「今よりも少ない内容でよい」6.3%や、「まったく必要性を感じない」7.1%と回答した学生もいる。ちなみに、過去 4 年間の全学部平均を早い年度から順に並べて比較して見ると、平成 30 年度までは時間の長短も含めて「今よりも少ない時間や内容で良い」と尋ねていたのに対して、令和元年度には内容の難易度に絞った質問に変えたものの、現状より簡素化したりレベルを下げることを希望した学生は 23.3%→20.3%→18.3%→6.3%と変化し、「まったく必要性を感じない」と回答した者は 12.7%→9.9%→6.7%→7.1%と変化しており、消極的評価を下す者の比率はほぼ減少傾向にある。キャリア教育の内容が年々改善を図られてきたことの結果であると見ることができるが、更なる授業改善や、キャリア教育の意義に関する学生の啓発を行う必要があろう。
・キャリアデザイン 1 を履修して良かった点については、全体的には昨年度からの大きな変化は見られない。良かった点として挙げられている上位 3 項目は「自己分析ができた」28.4%（27.9%）、「社会人基礎力が身についた」15.6%（14.1%）、「将来の目標ができた」11.9%（12.8%）であり、この設問に対する回答傾向はほぼ昨年度と同じである。キャリア

デザイン 1 の授業で実践しているペアワークおよび課題とも繋がりのある「コミュニケーション能力が向上した」7.8%（7.6%）、「自己管理力が身についた」6.9%（6.0%）も括弧内に掲げた昨年度の比率から見て、ごくわずかの上昇に留まっている。

８．学生の学修意欲について

・本年度１年次生における学修意欲についての質問項目では、入学時に「非常に意欲あり」31.7%（31.7%）、「まあまあ意欲あり」52.5%（47.5%）と自己分析している。この数値は前期終了時に、それぞれ 25.1%（21.0%）、55.6%（55.7%）に変わり、さらに学年末に当たる今回の調査実施時には 25.9%（24.6%）、52.7%（53.4%）となっている。括弧内の昨年度の数値と比較すると、ほぼ同様の状況であるが、「非常に意欲あり」の状態がよりよく維持されているように見える。一方、「あまり意欲なし」、「まったく意欲なし」と回答した学生の合計の割合は、入学当初 4.8%（3.8%）、前期終了時 3.8%（6.3%）、学年末 4.4%（6.9%）と、意欲のない状態で入学したものの、その後、状態がごくわずかながら改善していることが見て取れる。これが１年間の共通教育を主とした本学での教育の結果であれば喜ばしい。しかし、留年や退学防止の観点から、学修意欲の乏しい学生層に対する取り組みは、手綱を緩めることなくいっそうの改善を図る必要がある。

９．アンケート調査結果を踏まえた今後の改善策

以上述べてきたアンケート調査の結果を踏まえ、また、本文ではあまり触れなかった自由記述意見にも適宜言及しながら、全学共通教育の現況と改善策について今少し述べることで、本報告の結びとしたい。

まず、回答期間を延長し、学科を通じて協力を呼びかけたものの、全体としての回答率が 53.1%とかろうじて 5 割を少し上回る程度にとどまった。回答率は共通教育への関心のバロメーターとも言える。薬学部が 90.4%と、昨年度の 88.8%に続いて高い回答率であったのを除いて、生命工学部 56.6%、工学部 51.5%、経済学部 45.2%、人間文化学部 43.5%である。冒頭に述べたとおり、学科別に見ると、20%、30%台の回答率のところもあった。回答率の低い学科については、猛省を促したい。ゼルコバでの調査回答依頼や学生への一斉メールでの回答要請の他にも大学教育センター運営委員会の委員である各学科長を通じて調査への協力を学生に呼びかけたにもかかわらず、近年続いている傾向である回答率の低さは何とも遺憾である。共通教育担当教員の協力を得て、授業時間中に調査への回答依頼を教室で学生に直接伝えるなど、引き続き粘り強く協力要請を続けて行く以外にない。

大学教育センターが行っている各種の学修支援についての認知度の低さを深刻に受け止め、早急に改善策を講じなければならない。e ラーニング・システムについても認知度が 1 割を切っており、現行の英語教育関係のソフト以外に提供の必要性について改めて検討するとともに、これまでとは異なる方法で学生に対して活用を促す工夫を凝らす必要があろう。なお、新入生オリエンテーションに際して、学部・学科によっては、学内各施設への新入生の案内ルートに学修支援相談室などを組み入れるなど、これまでの方法の強化は言うまでもない。

学修意欲の乏しい学生の比率が相対的に低下したことは、今回の調査結果の中では注目すべき喜ばしい事柄であった。自由記述意見の中に「またあと 3 年間充実した生活を送りたいです」という記述が見られたが、まさに学生のこうした思いに応えるために努力を重ねなければならない。と同時に、同じく自由記述意見に見られた「大学では必要のないと思っている科目が必須科目になっていると思います。もう少し必須科目を減らしていただくと助かります」というものがあった。真摯に受け止め、カリキュラムのスリム化、とくに教養教育科目群の中の必修・選択の区分についても、固定観念を排して見直したい。これには、各専門学部・学科のいっそうの協力が不可欠であり、協働して共通教育のさらなる充実を図っていくことに努めたい。

以上